

歌を通した国際交流イベント

— 三重大学第4回国際交流週間 2010「外国語のどじまん大会」 —

吉井美知子・松岡知津子

**International Exchange Event through Song :
“Singing Contest in Foreign Languages”
in The 4th International Week at Mie University 2010,**

YOSHII Michiko, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This report concerns the results and possible future activities regarding the singing contest organized as part of the International Week held by Mie University. The Singing Contest in Foreign Languages is an event where foreign students and Japanese students vie with each other singing in a language other than their native language. By setting the condition that all participants must sing in a language other than their own, this contest ensured that Japanese students and foreign students participated on an equal footing.

The participants' countries of origin were Japan (4), China (3), Korea (2), Vietnam (2), Malaysia (1), Thailand (1), and the languages of the songs were Japanese (9), English (2), Italian (1), Galician (1). All foreign students sang in Japanese.

Japanese students and foreign students participated in the contest even from the preparation stages, performing almost all activities other than the judging of the contest, such as the preparation of the sound systems and others. Judging from the questionnaires received from the participants, there are aspects that could be improved for the future, but the event was an overall success.

キーワード：歌、外国語、国際交流、学生実行委員、ボランティア

はじめに

何人であれ、外国に留学するとなかなか留学先の国の友人ができにくいものであることは、留学経験者なら少なからず体験済みであろう。そのため、例えば日本人ならせっかく留学しても得た友人は日本人ばかり、あるいは他国の留学生ばかりということがしばしば起こる。

三重大学に留学している約250名の外国人学生にとっても事情は同様であり、なかなか日本人学生の友人ができないという悩みは、留学生相談担当教員の耳によく入ってくる。

せっかく日本にいるのに、研究室の教員や学生、事務職員、アルバイト先の上司や客以外の日本人に深く接する機会はそれほど多くない。片や日本人学生の多くは外国に目を向けることが少なく、日本人同士でかたまっている。仮に国際交流に興味を持っていたとしても、自分から声をかける勇気がなかったり、どのようにして国際交流をはかればよいのかが分からなかったりする学生も少なくない。留学や海外旅行をせずとも、学内で国際交流を行う可能性は十分あるというのに、そのチャンスを生かしきれていない。

この250名と残り7,000名の日本人学生と交わりを深めるきっかけを用意するにはどうしたらよいか。国際交流センターでは、この課題に応えるべく留学生支援を行う日本人学生ボランティアの紹介、チューター制度の推進等を行ってきた。その一環として国際交流週間が計画され、週間を通して行われる複数のイベントを通して外国人留学生と日本人学生が協働し、共に楽しむことによって交わりのきっかけを提供している。

本報告ではその国際交流週間の1イベントとして2010年に開催された「外国語のどじまん大会」を取り上げ、歌を通じた国際交流の成果と課題を考察する。本報告が今後の国際交流イベントの企画・実施の参考となり、さらなる大学の国際化につながることを期待している。

1. 国際交流週間の概要

三重大学国際交流週間は国際交流センターが主催する一連のイベントであり、2007年度より開始された。留学生と日本人学生や地域の人々との国際交流を目的とし、年度内の1週間に集中して学内外で国際交流イベントを開催するものである。表1に第1回から第3回までの概要を掲げる。

表1 三重大学国際交流週間 2007-2009 の概要

	年度	日程	イベント内容
第1回	2007	12月5日(水) - 8日(土)	エスニック料理フェア、日本語SC、写真C、国際交流パネル展、英語SC、国際交流パーティ
第2回	2008	7月1日(火) - 5日(土)	エスニック料理フェア、日本語討論会、日本語SC、スナックタイム、映画上映、写真C、留学フェア、ブータンを知ろう、英語SC、民族衣装着付け、国際交流パーティ、スポーツ大会
第3回	2009	10月17日(土) - 24日(土)	日本熱帯農業学会公開シンポジウム、三重大学国際ジョイントセミナー&シンポジウム、国際環境シンポジウム「四日市学」、国際理解セミナー

(注：SC はスピーチコンテスト、C はコンテストの略)
(三重大学国際交流センター年報第2, 3, 4号を参考に筆者作成)

表1を見ると、第1回と第2回においては各国の文化やパーティ、スポーツ等を通して交流が図られているのに対し、第3回ではどちらかという学術的なシンポジウムやセミナーが主体となっていることが目を引くが、これは2009年には三重大国際ジョイントセミナー&シンポジウムという大きな国際交流イベントを三重大が主幹校となってホストする年に当たっていたため、これとその前後のイベントを合わせて国際交流週間と位置づけたことによる。

2010年度にはこのような大イベントはなかったため、第1回、第2回の経験をもとに文化やパーティ、スポーツでの交流を中心として第4回の国際交流週間を企画することとなった。表2にその概要を掲げる。

表2 第4回三重大国際交流週間2010の概要

日付	時刻	会場・場所	イベント	外部の協力者
7月3日(土)	終日	京都東山方面	留学生研修旅行	
7月5日(月)	12:00-13:00	メディアホール	韓国フェア	人文学部朴研究室
7月6日(火)	13:00-14:30	メディアホール	国際協力入門セミナー	JICA 中部
7月7日(水)	16:00-18:00	メディアホール	日本語スピーチコンテスト	
7月8日(木)	16:30-18:30	メディアホール	外国語のどじまん大会	
7月9日(金)	16:00-18:00	メディアホール	英語スピーチコンテスト	
	18:30-20:30	生協第一食堂	国際交流パーティ	三重大学生協
7月11日(日)	終日	第一体育館	国際交流スポーツ大会	

本稿で報告する「外国語のどじまん大会」は、表2に掲げた第4回国際交流週間の8イベントのなかの1つとして位置づけられる。第1回から第3回までの経験に比して、初めての「歌」を介した交流イベントであることが特筆され、いわば三重大国際交流センターとしては初の試みであった。

2. イベント企画から準備まで

一般に芸術やスポーツは文化の差異や国境を越えた交流に最適とされる。ルールさえ予め共有しておけば、走ることやボールを蹴ることに文化や国籍はあまり関係がなく交流ができる。美しい絵画は世界的に賞賛されるであろう。音楽もまた国際交流に適しているといえる。アメリカのポップスは世界中で聴かれているし、最近ではJポップが東アジアや東南アジア諸国でヒットしている。

イベント担当者はまずこの音楽の普遍性に着目し、従来の国際交流週間では企画されて

いなかった音楽を通した国際交流を考えた。さらに「音楽」を「歌」に限定することで、「歌詞」が関与する状況をつくりだした。これにより「どこの出身の人でもわかる」という普遍性からは一步退いたことになるが、逆に「母語でない外国語で歌うべし」という条件をつけることで、出演者には「外の文化を自分の中に取り込んで自分なりに表現する」という作業を課すことで国際交流につなげた。

イベントは楽しくなくては人が集まらない。そこで単なる外国語の歌の発表会ではなく、これをコンテスト形式の「のどじまん」とすることで出演者が競い合い、審査、採点を行って賞を設けることとした。これによりゲーム性が出て楽しくなるし、出演者は賞を目指してがんばる。聴いている方も誰が一番だろうかとわくわくする。

国際交流センターで日々日本語を学習している留学生にとっては、日本語で歌うことは学習の成果発表にもつながる。ただし、出演者を留学生や日本語に限定してしまうと、外国人だけのイベントになり交流の効果が薄れるため、日本人学生にも門戸を開き、全員に母語以外であれば何語で歌ってもよしとした。

日程については、国際交流週間が通常の授業が行われている学期中に当たったため選定に苦慮したが、平日木曜日の夕方とした。授業のない夜間や週末に行うとかえってアルバイト等で忙しい学生が集まりにくいと判断したためである。会場はセミナースタイルで 50 名、椅子席で 100 名が収容できる三重大学メディアホールとした。出演者は 12 組、集客は 50 名 (出演者を含む) を目標とした。

企画がまとまったのが 2010 年 5 月であったため、出演者募集は 5 月下旬より開始、6 月 24 日までに申込書を提出することとした。応募者多数の場合に予備選考を行うことを想定し、申込書には自分の歌を吹き込んだ CD 等のソフトを添えることを要求した。

同時に学生実行委員会を立ち上げ、授業等を通じて募集したボランティア学生に出演者勧誘、各種係等の準備作業を割り振り、1-2 週間ごとに昼休みに集まり進捗状況の確認を行った。担当教員側では、広報用のポスター作成と学内の教員 3 名への審査員の依頼を行った。賞品として図書券を準備、また参加賞も用意した。上位 3 組には賞状も出すこととした。

広報に関しては、国際交流週間全体の告知をホームページや留学生メーリングリスト、ポスター、学内会議を通じて行ったほか、のどじまんに関しても別途、ポスターやちらし (付録 1 参照) を掲示、配布して告知に努めた。特に出演者勧誘については国際交流センターの日本語中級Ⅱの授業、日本事情「日本の歌」の過去のもしくは現受講生を中心に、広く募集を行った。

最終的に出演者は 13 組が集まり、予選なしで全員が本選に出場できることとした。出

身地別に見た13組の内訳は、日本(4)、中国(3)、韓国(2)、ベトナム(2)、マレーシア(1)、タイ(1)であった。また歌唱言語別では、日本語(9)、英語(2)、イタリア語(1)、ガリシア語¹(1)であり、留学生は全員が日本語で歌うこととなった。

司会進行は学生実行委員のなかから中国人男子留学生と日本人女子学生がペアで担当することとなった。同様に、撮影、ステージマネージャー、余興、音響、受付もそれぞれ学生が担当した。来場者全員に配布するプログラムも学生が担当してデザインを行った(付録2参照)。審査員が審査を行う時間中には、余興としてギターマンドリンクラブによるミニコンサートが用意された。また表彰式後の最後に出演者と客席の全員で合唱する歌も準備し、歌詞カードをプログラムに組み込んだ。そして本番当日、昼休みには出演者全員を会場に集めて1コーラスのみのリハーサルを行い、準備は万端となった。

全体的に、企画段階では担当教員が中心となって学生の意見を取り入れながら計画を作成していったが、具体的な準備にかかる段階でその多くを学生実行委員会に依ったことが特筆できる。

3. 「外国語のどじまん大会」の実施

そして迎えた2010年7月8日、本学総合研究棟Ⅱのメディアホールにおいて「外国語のどじまん大会」が実施された。

大会では、出場者にマイクを使わずに歌うことを課し、できるだけ多くの人が近くで聴けるように机をすべて取り払った。椅子だけを並べることで、出場者と観衆の距離が縮まり、全体が一体となった(写真1参照)。

心配していた集客数は60名を超え、急きょプログラムを追加で印刷するなどうれしいハプニングとなった。

出場者は、リハーサル通り、ひと組ずつ前に出て予定していた歌を歌いあげた。13組の出場者のうち、単独での出場が10組、2人以上での出場が3組あった。中には、韓国人学生と中国人学生によるデュエットもあった。

最初の方の出場者は多少緊張気味であったが、それぞれの出場者がゆかたやチャイナドレスといった衣装、さらにはパフォーマンスにも気を配るなど、耳だけでなく目でも観衆



写真1 本番の熱唱
(2010年7月 栗山撮影)

¹ スペイン北西部で話されている地方語。

を楽しませた。また、観衆からも、歌の合間に花束のプレゼントが出場者へ贈られるなど、会は大いに盛り上がりを見せた。

すべての出場者が予定通り歌ったところで、審査委員は別会場へ移動し、20分の審査に入った。その間、本学ギターマンドリンクラブによる演奏が行われ、同時に観衆に対するアンケート用紙への記入もお願いした。アンケートの内容については、次章で詳しく述べることとする。

審査結果が出たところで、全体への講評と結果発表、表彰式が行われた。3名の審査員により「歌詞」「音楽性」「パフォーマンス」の3つの観点から厳正な審査が行われた結果、1位は「懐かしい未来」²を歌ったタイ人男子留学生に決定した。続く2位は「涙そうそう」³を歌ったマレーシア人女子留学生、3位は「OB-LA-DI, OB-LA-DA」⁴を歌った日本人学生のグループが受賞した。表彰式では、受賞者を含むすべての出場者に会場から温かい拍手が送られ、最後には全員で「世界に一つだけの花」⁵を合唱し、会は成功のうちに幕を閉じた。

4. 成果と課題

イベントは成功裏に終わったが、出演者や参加者の反応はどうであったか。本章ではイベントの成果を測るため参加者から回収したアンケート32通の結果を考察する。

アンケートはすべて記述式とし、3問だけを和文および英文で掲げた。回答者の国籍、性別、所属、学年、出場の有無等は一切尋ねていない。

(1) 今日の「外国語のどじまん大会」はどうでしたか。楽しかった、普通だった、つまらなかった等、自由に答えてください。

「楽しかった (joyful, fantastic, amazing)」との回答が16、「すごく (大変、とても、ほんまに、超) 楽しかった」が11で、これに「よかった」(3)、「とてもよかった」(1)を加えると31になり、ほぼ全員が楽しめたと考えられる。残り1名は、「もっと盛り上げてほしかった」と批判を記していた。

また楽しかった、よかった理由として、「外国語で一生懸命に歌う姿に感動した」(2)、「みんな歌が上手」(3)、「たくさん多種多様な歌が聴けた」(4)等が挙げられていた。

今後のこととして、「もっと同様のイベントを開いてほしい」(4)、「次回は自分も出場

² 新居昭乃の歌ったJポップ。1986年の作品。

³ BEGINによるJポップ。2000年にリリース。

⁴ 1968年発表、ビートルズのヒット曲。

⁵ SMAPの歌ったJポップで2003年に発表、大ヒットした。

する」(2)との回答もあった。

(1)の結果から、全体的にイベントは参加者を楽しませることに成功したと結論できるであろう。特に母語以外の外国語で歌うべしとした条件が、日本人にも留学生にも同様な努力を強いたことがかえって聴衆に感動を与えて功を奏したといえる。

(2) 次回に向けて改善したらよいと思う点があったら挙げてください。

この設問には、無回答や「問題なし」とする回答もあり、改善点の指摘は19通にとどまった。前問で「もっと盛り上げること」とした回答を加えた20点を整理すると次のようになる。

まず運営のソフト面では、「広報・告知を工夫して参加者を増やすこと」という提案が4、「時間帯が出にくい」という指摘が1あった。確かに授業に重なって出られないという苦情も、アンケート回答者以外から口頭で受けている。そもそもイベント自体の存在を知らない学生も、日本人学生を中心にかなりいると思われる。今後は日時の設定に際して工夫が必要であろう。また学内広報についてもさらにこれを広めるための方策を考えたい。

ソフト面に関して、「司会をもっと派手に、自然に、盛り上がるように、曲と曲の間をスムーズに」という指摘も4あった。また「審査時間が長すぎる」という回答が1あった。司会は実行委員の学生2名が担当したが、もちろん素人であることを考慮すれば、リハーサルを増やすなどの対応が必要であろう。審査に関しては、時間短縮することよりもむしろ待ち時間を余興で楽しく過ごしてもらいたい。

当日は予想を超えた参加者があったため、準備したプログラムが部数不足となった。これに関する指摘も1あった。また、プログラムには出場者名や曲名は出ていたが、元々歌った歌手名は載せていない。歌詞の内容や歌手名を加えてほしいという要望も2名から出た。今後の課題である。

ハード面での改善点としては、音響装置に関する指摘が3あった。メディアホールの音響装置の調子が悪く、マイクに雑音が入ったりしたことが影響したものと考えられる。今後はホールの機材に頼らず、外部から機材を調達する等の工夫をしたい。その他のハード面での指摘としては、「舞台を高くすること」、「会場の飾り付けを工夫すること」等が挙げられていた。

その他の回答では、「出場者が緊張しないこと」とあったが、これはリハーサル回数や時間を増やすくらいしか対応のしようがない。「食べ物を出してほしい」という要望もあったが、これについては同じ国際交流週間内に行われるパーティにまとめた方がよいと考える。

改善点の指摘は数としては多くなかったが、貴重なデータであり、それぞれに検討をし

て対応を考えていきたい。

(3) 感想、出演者に贈る言葉、文句、つぶやき、何でも書いてください。

この欄は何でも自由に記述してもらおうと設けたものであったが、(1)や(2)の回答とも重複するような意見が多く得られた。24人が何らかの記述を行っている。

感想としては、「感動した」、「よかった」、「おもしろかった」、「上手でびっくりした」、「とても楽しかった」等の好意的な評が22あった。出演者の勇気や演出、衣装、歌の上しさなどが感動の理由として挙げられている。「外国の人が日本語で歌うことに感動した」という日本人学生からと見られる感想もあった。

「出演者に贈る言葉」としたことで、実際に出演者ひとりを名指しして感動の気持ちを述べたファンレターのような回答も2通あった。

「また来たい」「次回は私が出場します」「掲示板で教えてほしい」という、次回を期待する感想も3あった。さらに「もっとこういう機会を増やしてほしい」「冬にも開催してほしい」という要望も3通寄せられている。

以上のようなアンケート結果より、まず本イベントが三重大学の留学生と日本人学生との国際交流を促進するという国際交流週間の目的達成に貢献したと結論できるであろう。もちろんこのような分析でイベントの目的達成貢献度を数値で表すことは困難である。他のイベントと比較してどちらがどの程度貢献したかという議論も意味がない。しかし、①アンケート回答者のうち1名を除く全員が肯定的な感想を述べていること、②「次回には自分が出場する」「もっと頻繁に開催してほしい」という再度の開催への期待を述べた回答が8通あったこと、③従来の同様のイベントでの実績から推測した参加者数を上回る客が集まったこと、という三つの理由から、本イベントが学内国際交流の促進に有意義な企画であったと結論づけられるであろう。

以上の結論はイベント参加者のうちの32名から集めたアンケート結果により得られたものであるが、参加したがアンケートに回答しなかった学生、あるいは参加したくてもできなかった学生、さらにはそういうイベントがあることを知らなかった学生がその背後に大勢いることを忘れてはならない。要望に応じて第2回の外国語のどじまん大会を開催する場合には、アンケートで改善点として指摘されているように、さらなる広報、イベント告知、出演者募集の呼びかけ、より適切なイベント日時の設定などを心がけていく必要があるだろう。

5. 今後の展望

「もっと頻繁に開催を」「冬にも開いてほしい」という参加者の声は受けたが、国際交

流週間を年度内に再度開催する予定はなかった。その代替として2010年12月19日、三重大学国際交流センターが企画委員として参加する地域のイベント「国際交流フェスティバル」において「国際のどじまん大会」を企画し、津駅前のアスト津ビルにおいて実施した。同フェスティバルはみえNPOセンター・ワーカーズコープを中心に三重県下のNPO、市民団体、財団、三重県、JICA中部等が共同して開催するもので、地域全体の国際交流を目的としている。のどじまん以外には、各国の踊り、各国の子育てを考えるミニシンポジウム、各国の食のコーナーやフェアトレード商品の販売などが行われた。

のどじまんでは学内イベントのときと同様に、母語以外で歌うべしという条件を設け、出場者を公募したところ16組が応募し、午前中に予選、午後10組を選んで決勝が行われた。三重大学からは学生6組が出場し、うち4組が決勝進出、受賞者2組を出すなど大健闘であった。また950名のフェスティバル来場者のうちの多くが観客として集まり、成功を画した。

本事例は、学内で成功した国際交流イベントに手を加えて一般向けとし、地域の国際交流イベントに応用したという意味で有意義である。観客への「ウケ」はすでに学内イベントで実証済みだし、運営のノウハウも蓄積されており、これらを地域イベントの運営メンバーに説明・移転することでよりスムーズに実施ができる。

今後は学内の国際交流週間でののどじまんをさらに改善して続けるとともに、学内で得た知見を地域に広げる視点も持って活動を続けていきたい。

おわりに

本稿では歌を通じたイベントにより学内の国際交流を促進した事例について報告した。考察で詳述したとおり、イベントは成功し、参加者からは好評を得た。数値では測れなくとも、本イベントが学内の国際交流の促進に貢献したことは疑いを入れない。出場者や参加者からは、留学生が一生懸命に日本語で、あるいは日本人学生が外国語で歌っている姿への感動が述べられている。

しかし最も本イベントにより国際交流を深めたのは、誰よりもイベントの運営を裏で支えた学生実行委員のメンバーであろう。メンバーは国際交流センターが開講している日本語授業や英語による授業の受講生を中心に、さらに口コミで学内全体から募集した。のどじまんを担当した8名は、中国人（司会）、韓国人（舞台監督）、タイ人（音響）に日本人5名を加えた国際的な陣容であった。イベント本番はわずか2時間で終了したが、その根底には約2ヵ月にわたる実行委員の辛抱強い準備作業があった。イベント成功は彼ら彼女らの努力の賜物と言っても過言ではない。そしてその協働自体が、イベントの目的である

国際交流の促進に直結していたのである。結果ばかりでなく過程までもが目的をより大きく達成していたといえる。

2010年12月、久々に再会した学生実行委員のひとりから声をかけられた。「先生、このごろ何かイベントありませんかね。またやりましょうよ。」一千通の好意的アンケート結果にもまさる、うれしい一言であった。

参考文献

- 烏賀陽弘道 (2005) 「J ポップとは何かー巨大化する音楽産業ー」、岩波新書、岩波書店、東京
田家秀樹 (2004) 「読むJ ポップ 1945ー2004」、朝日文庫、朝日新聞社、東京
三重大学国際交流センター (2008) 「年報」第2号、2007年度、p.41
三重大学国際交流センター (2009) 「年報」第3号、2008年度、pp.31-32
三重大学国際交流センター (2010) 「年報」第4号、2009年度、pp.27-29

付 録

1. 外国語のどじまん大会広報ちらし
2. 外国語のど自慢大会プログラム

付録 1



第4回 三重大学国際交流週間2010

4th International Week at Mie University 2010

外国語のどじまん大会 出場者募集!

日時：2010年7月8日(木)

16:30~18:30

場所：総合研究棟 II 1F

メディアホール



・ 出場希望者は、自分が歌った歌(5分以内)を録音し、6月24日(木)までに松岡まで持ってくること。

(※本番で歌う歌と同じ歌。変更不可)

・ カラオケ、生伴奏可。ただし、各自準備すること。

・ 本番では歌詞をみてはいけません。

・ 母国語不可、フルコーラス

・ 12組(個人又はグループ)

上位入賞者には
豪華景品!

申し込み・問い合わせはメールで...

松岡知津子 chizkom@cie.mie-u.ac.jp

2010 三重大学国際週間

外国語のど自慢大会

7月8日

総合研究棟1階メディアホール

外国語のど自慢大会

16.30~18.30

10.30~18.30

外国語のど自慢大会

ありがとう.....

- ▶ 三重大学
- ▶ 国際交流センター
- ▶ 副学長・国際交流センター長 松岡 守 (審査員長)
- ▶ 教育学部教授 根津 知佳子 (審査員)
- ▶ 国際交流センター教授 花見 楨子 (審査員)
- ▶ 国際交流センター教授 吉井 美知子 (指導管理)
- ▶ 国際交流センター准教授 松岡 知津子 (指導管理)
- ▶ 聴取者のみなさん
- ▶ ギターマンドリンクラブ
- ▶ 生物資源大学院生1年 栗山 翔太 (撮影)
- ▶ 人文学部交換留学生 羅貴子 (Stage Manager)
- ▶ 教育学部4年 森本 真央 (Recreation)
- ▶ 教育学部4年 茂谷 彩加 (Stage Manager)
- ▶ 工学部3年 呉 成浩 (司会)
- ▶ 国際交流センター留学生 ジョンジャイラック スイリワット (音響)
- ▶ 人文学部1年 鶴田 志紀 (司会)
- ▶ 生物資源学部1年 清水 陽介 (音響)

松岡 守 (審査員長)
 根津 知佳子 (審査員)
 花見 楨子 (審査員)
 吉井 美知子 (指導管理)
 松岡 知津子 (指導管理)

栗山 翔太 (撮影)
 羅貴子 (Stage Manager)
 森本 真央 (Recreation)
 茂谷 彩加 (Stage Manager)
 呉 成浩 (司会)
 ジョンジャイラック スイリワット (音響)
 鶴田 志紀 (司会)
 清水 陽介 (音響)

ございました。



プログラム

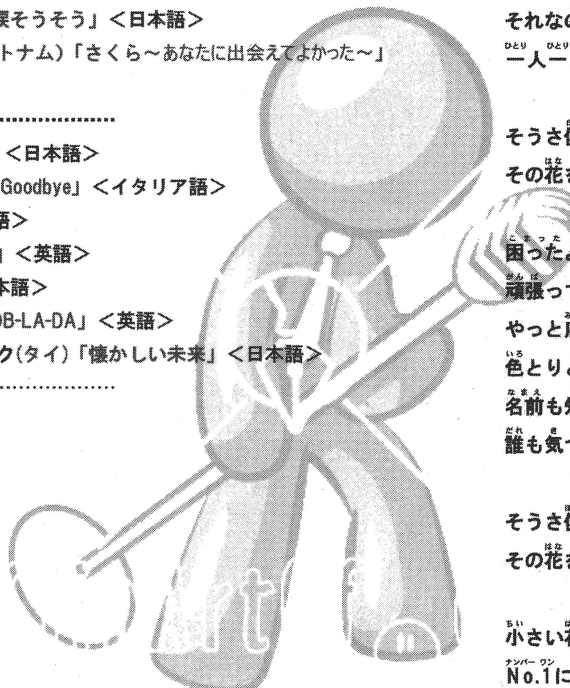
1. キムガイン (韓国) 「心こめて」 <日本語>
2. 三山すみれ (日本) 「Memoria da Noite」 <ガリシア語>
3. チャン ティー ウィンサー (ベトナム)
「時の流れに身を任せ」 <日本語>
4. 趙明珠 (中国) 「蘇州夜曲」 <日本語>
5. 伍アリシア依賢 (マレーシア) 「涙そうそう」 <日本語>
6. ディン・マイン・トゥアン (ベトナム) 「さくら～あなたに出会えてよかった～」
<日本語>

.....

7. キュウタクガイ (中国) 「Tokyo」 <日本語>
8. 橋本泰宏 (日本) 「Time To Say Goodbye」 <イタリア語>
9. 高原 (中国) 「初恋列車」 <日本語>
10. 宮城慎也 (日本) 「Stop this train」 <英語>
11. ソジョンホ (韓国) 「粉雪」 <日本語>
12. 栗山翔太 (日本) 「OB-LA-DI, OB-LA-DA」 <英語>
13. スイリワットチョンチャイラック (タイ) 「懐かしい未来」 <日本語>

.....

ギターマンドリンクラブ演奏



世界に一つだけの花

花屋の店先に並んだ	いろんな花を見ていた
人それぞれ 好みはあるけど	どれも皆 きれいだね
この中で誰が一番だなんて	争うこともしないで
バケツの中 誇らしげに	ちゃんと胸を張っている
それなのに 僕ら人間は	どうしてこうも比べたがる?
一人一人違うのに その中で	一番になりたがる?

そうさ僕らは世界に一つだけの花	一人一人違う種をもつ
その花を咲かせることだけに	一生懸命になればいい

困ったように 笑いながら	ずっと迷ってる人がいる
頑張ってる花はどれも	きれいだから仕方ないね
やっと店から出てきた	その人が抱えていた
色とりどりの花束と	嬉しそうな横顔
名前も知らなかったけれど	あの日僕に笑顔をくれた
誰も気づかないような場所で	咲いてた花のように

そうさ僕らも世界に一つだけの花	一人一人違う種を持つ
その花を咲かせることだけに	一生懸命になればいい

小さい花や 大きな花 一つとして	同じものはないから
No.1にならなくても いい	もともと特別な Only one